

# 第十七章 マリンポリン製鉄所

「誰がこんなトンネルを掘ったんだ？」

レッド・エレファントが現れたクリーム半島に近い島を見つめながら加藤が榊に尋ねる。

『『ノロ』と言いたいが、それはないな』

「海底トンネル自体信じられないのにトンネルが完璧にシールドされているとは。それにあの戦車。赤いペンキを発射して何をしようというのだ」

榊の返事が途絶える。榊と加藤は宇宙戦艦からウクライナ共和国の元領土でソシアに併合されたクリーム半島を詳しく観察する。ソシア海軍ブラックシー艦隊基地で一部の軍艦が原子レベルまでに分解されて赤い砂嵐となつて結局すべての艦船が錆びてしまった。

このレッド・エレファント戦車のアイアンレッド光線を浴びた鉄は錆びてしまう。粒子となつた錆がほかの鉄も錆びさせる。まるで感染力の強いウイルスのように広がる。クリーム半島を併合したソシア軍のあらゆる鉄製の武器が使用できなくなつた。

「こんな兵器を造るとしたら、やっぱりノロしかないない」

榊も加藤も同じ考えだがうなずき合わない。

「ノロはノロの惑星でへびと戯れている。ここまで凝つた武器を造るヒマはないだろう。それ

に海底から現れたと言うことは宇宙から持ち込まれたとは言えないだろう」

「じゃあ、誰が造った？」

言った方も聞いた方も首を傾げる。するとイリが断定する。

「新疆ウイルス自治領で隠れるように暮らすグレーデッドの残党……残党なんて失礼な言い方。そうノロと一緒に第二の地球探索に向かわずに地球を何とかしようとした残った科学者たちじゃないかしら」

「確かに彼らの科学力はすごいし平和への執着心も強い」

元グレーデッドに在籍したこともあった加藤が大きく首を縦に振る。

「ノロはいい加減な人間よ。確かにすごいアイデアを出してびっくりするようなモノを製造したけれど大型の、たとえば宇宙戦艦を製造したのはグレーデッドよ」

榊は反応しないが加藤は強くイリの見解に同調する。

「彼のような独創的なアイデアを具現化したのはイリがグレーデッドの総統に就任してからだ。それからノロはイリの権力を笠にグレーデッドの製造能力をとことん利用した」

「ちよつと納得できないけれど結論が出たわね。ウイルス族は元グレーデッドの構成員。元と  
言うよりグレーデッドそのもの」

「ノロと袂を分けたグレーデッドがウイルス族と名乗って中華明国内に残ったと言うことか」

「中華明国は世界の工場と言われるほど成長したからグレーデッドにとってモノを作りやすか

ったのかも知れないわ」

\*

クリーム半島のつけ根に錆びた鉄クズが集められた。誰が指示しているのか不明だが無蓋貨車に次々と積み込まれると新疆ウイルス自治領で見た蒸気機関車が力強く牽引を開始する。数千メートルの超える長大編成だから一両の機関車ではスピードは出ない。目的地はウクライナー共和国東部の要衝マリンポリンの巨大製鉄所だった。

不思議なことに鉄の塊のような蒸気機関車も貨車も錆びることはない。クリーム半島のソシア軍艦が伝染病に感染するように次々と錆び付いたのは一体何だったのだろうか。また、なぜソシア軍が完全掌握しようとするマリンポリンに向かう目的は？

ウィルス族の正体がグレーデッドだと分かっても疑問は積もるばかりだった。

「錆びた鉄を製鉄所で新品に戻すのでは？」

「それならマリンポリン製鉄所より治安がいい製鉄所を選べばいいのに」

イリは納得しない。

「それにこんなノロノロ移動していたらソシア軍にやられるわ」

「いや攻撃を仕掛ければソシア軍の戦車や武器はすべて錆びてしまうかもしれない」

加藤が宇宙戦艦の艦橋の巨大立体透過スクリーンをつぶさに見ながらポジティブな見解を返す。そしてマリンポリンに向かう長蛇の車列の最後尾に注目する。

「これは？」

視線ポインターを先頭の蒸気機関車に置く。

「黒じゃない」

「黒に見えるけれど」

「蒸気機関車だからお先真っ暗……じゃなかった。真っ黒だと思っていたけどよく見ると濃い群青色だ」

「群青色？ コバルト色……黒に近いコバルト色」

榊が同調する。

「問題は最後尾だ！」

榊が視線ポインターを移動させる。最交尾の車両にはコバルト色の大きな牛のような戦車が積まれている。

\*

長い長い列車がマリンポリン駅を通過して製鉄所への支線に入るとさらに速度を落とす。製鉄所を取り囲むソシア軍の攻撃が始まるという予想に反して撤退を始める。というより撤退せざるを得なかった。ソシア軍の戦車や装甲車が赤く染まる。錆びついたのだ。こちらの方の予想は当たった。

ようやく列車が停止する。製鉄所がいくら広いと言っても後方の車両は敷地外にはみ出す。

イリも榊も加藤もそれつきり黙ってしまおう。

製鉄の敷地内で貨車に積まれていた赤い鉄粉やソシア軍の戦車などの錆が舞い上がる。すぐに空一面が赤くなる。夕焼けのような美しい光景ではない。しかし、哀愁を感じさせる奇妙な流れを見せる。そのとき地上のある一点が真つ青に輝く。あのコバルト色の戦車が光源だった。

肉眼ではその詳細な情報はつかめないが宇宙戦艦の巨大立体浮遊スクリーンに鮮明な映像が現れる。牛の頭のような砲塔が見える。レッド・エレファントのような長い牙ではないが角が群青色に染まると透き通るようなブルーに輝きながらその角を無限長に伸ばす。さすがに宇宙戦艦の次元カメラが捉えた映像は寸分の狂いもない。

赤い空が急にコバルト色に変化する。いわゆるマジックアワーに突入したような感じがする。当然長続きしない。すぐ暗闇になる。夜になったわけではない。時刻は昼の一二時。

やがて空は本来の色を取り戻す。雲一つないブルースカイ。そして製鉄所は空と同じ色のコンテナに取り囲まれている。ガラス張りのコンテナが空の反射を受けて青くなっているように見えるが、そうではないことがすぐさま判明する。

「これはスーパァイアンだ」

「ステンレス？」

すぐさま加藤が榊に尋ねる。

「鉄というのは最強の金属だ。血液にとっても重要な成分だし物作りにも欠かせない」

「わかりやすく説明して」

イリのクリームが入る。ノロはいかにしてイリに易しく説明するかで苦労したが、今の榊や加藤にはそんな義務はない。

「生命に必要で、かつ、武器にもなる。とノロが言っていた」

「わかりやすい！」

しらけるが榊が続ける。

「この錆びた鉄を次元加工するとステンレスなどのレベルではなく最強の金属になるかもしれない。それでいて加工しやすいかも……あり得ないことだ」

イリが黙って二人を見つめる。

「ノロはその技術を習得していたから時空間移動装置や宇宙戦艦を製造できた。その技術をレッド・エレファントとコバルト・カウに移植したとしたらすごいことだ」

「いずれにしてもノロも頼っていた高い技術を持つグレッツデッドはウイルス族と名を変えて大国中華民国の片隅に潜伏した。ソシアのウクライナー侵攻を機に騒がしくなった地球を何とかしようと思ち上がったのかもしれない」

目を閉じてイリが頷く。